

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

The Dickens Fellowship of Japan

2014年度春季大会

ディケンズ・フェロウシップ日本支部

日本マーク・トウェイン協会合同大会 プログラム

Spring Conference 2014, Joint Meeting with The Japan Mark Twain Society
Programme

日時：2014年6月21日（土） Date: 21 June 2014

会場：明治大学 駿河台キャンパス・リバティータワー 12階 1125教室

(東京都千代田区神田駿河台1-1)

Venue: Room 1125, Liberty Tower, Meiji University, Kanda-Surugadai, Chiyoda, Tokyo

理事会 Board of Trustees Meeting (12:00 – 13:00) リバティータワー12階 1127教室

基調講演 Keynote Lecture (13:00 – 14:10)

講師：井川眞砂（日本マーク・トウェイン協会会長）Masago IGAWA

(President, The Japan Mark Twain Society)

「「とびきり上等」だったミシシッピ川の蒸気船——トウェインのディケンズ評」

The Mississippi Steamboats Were “Magnificent”: Twain Measures Mr. Dickens’s Position

佐々木徹（ディケンズ・フェロウシップ・日本支部長）Toru SASAKI

(President, The Dickens Fellowship of Japan)

「ディケンズとトウェインの接点？」 Looking for Connections between Dickens and Twain

シンポジウム Symposium (14:20 – 16:50)

「『アメリカ紀行』を手がかりに」

Dickens/Twain and *American Notes*

司会・講師： 里内克己（大阪大学）Katsumi SATOUCHI (Osaka University)

講師： 天野みゆき（県立広島大学）Miyuki AMANO (Prefectural University of Hiroshima)

講師： 松本靖彦（東京理科大学）Yasuhiko MATSUMOTO (Tokyo University of Science)

講師： 宇沢美子（慶應義塾大学）Yoshiko UZAWA (Keio University)

おわりに Closing Remarks (16:50 – 17:30)

佐々木徹（ディケンズ・フェロウシップ日本支部長）Toru SASAKI

(President, The Dickens Fellowship of Japan)

井川眞砂（日本マーク・トウェイン協会会長）Masago IGAWA

(President, The Japan Mark Twain Society)

懇親会 (18:00 – 20:00) Convivial Party

会場：紫紺館（リバティータワー向かい）

会費：一般7,000円、学生5,000円

基調講演

講師：井川眞砂「「とびきり上等」だったミシシッピ川の蒸気船——トウェインのディケンズ評」

イギリスとアメリカにあってそれぞれ自国でひろく読まれ、愛された国民作家ディケンズ（1812—70）とトウェイン（1835—1910）は、国境を越えてもまた大勢の読者を得た。だからこそ二人とも国際著作権法設立のために訴え続けたのだった。他にも二人の共通項は少なくない。だが、ここにとりあげるのは、この二人が依って立つ基本的な立場の違いではないかと思われる点。すなわち、ミシシッピ川の蒸気船を形容する（『アメリカ紀行』中の）語句を巡って、トウェインがディケンズを評するその姿勢である（『ミシシッピ川的生活』第38章）。決してディケンズを批判するわけではないものの、トウェインは、東部の言い方と西部の言い方との違い、あるいは、ほんの二、三の金持の立場と大多数の人々の立場との違いを対比するかのようにして評し、ミシシッピ川の西側に住む大多数の人びとの蒸気船に対する賛嘆の気持ちにぴったりの表現、「とびきり上等(magnificent)」(=ディケンズが使いたくない語句)に軍配を上げるのである。

講師：佐々木徹「ディケンズとトウェインの接点？」

トウェインとディケンズの文学的接点は何か？ どの問題をとりあげればまともな話ができるだろうか？ この問いに対して、第一感、頭に浮かぶ答えは、「ユーモア」と「子供」である。しかし、そもそもユーモアについて語るの難しいし、ディケンズのユーモアだけでもその本質を見極めるのが大変なのに、トウェインまでカヴァーするとすると、これは十年早い。いや、二十年早いと言うべきだろう。だから、諦める。では子供は？ 僕は自分の子供は好きだが、よその子供には関心がない。だから、これも諦める。結局、正面ではなく、からめ手から攻めるとしよう。つまり、間に誰かを挟んだら何とか話がつながるのではないかという発想で、ストウ夫人とブレット・ハートを中間項にしてディケンズとトウェインがセンチメンタリズム、センチメンタリズム、メロドラマといった点でどうつながるか、あるいはつながらないか、を考えてみたい。

シンポジウム

「『アメリカ紀行』を手がかりに」

ディケンズとトウェインは、それぞれイギリス・アメリカを代表する国民作家として現在に至るまで親しまれていますが、二人の書き手を比較もしくは対置しつつ本格的に論じる試みは、まだ少ないように思われます。両作家が活躍した時期にずれがあることを考えれば、それはある意味で無理からぬことですが、ディケンズの二度にわたるアメリカ旅行や、ディケンズの著作をトウェインが愛読していたこと、そして大西洋を越えて英米両国で大衆的人気を博した作家だったという共通性などを鑑みると、二人の作家が重なる部分にもっと目が向けられてもいいのではないのでしょうか。このシンポジウムでは、ディケンズにとって最初のアメリカ体験から生まれた旅行記『アメリカ紀行』*American Notes for General Circulation* (1842年)を手掛かりとして、4人の研究者がそれぞれ異なる角度から両作家の時空を超えた〈交流〉の様相を探っていきます。フロアの皆様の便宜を考え、入手が比較的容易なペンギン・クラシックス版(1985年)を共通のテキストとして使用します。日本語による訳業(岩波文庫、2005年)も参照しつつ、できれば事前にお読みのうえご参加いただけましたら幸いです。

司会：里内克己「自由と隷属」

初めてアメリカを旅した際、ディケンズはケアロ以南に足を踏み入れておらず、南部の奴隷制度に関する記述は、『アメリカ紀行』のなかでは多くの分量を占めるものではない。にも拘わらず、この書には奴隷制に対する強烈な嫌悪が表明されており、何らかの形で自由を奪われた人々に対する筆者の共感的な眼差しがこの書では強く感じられる。そうした特質は、トウェインが愛読した『二都物語』のような後年の小説作品にも認めることができる。ディケンズの旅から40年後、トウェインはケアロから南に川を下ることによって、この先輩作家が取り上げた人間の自由と隷属という主題を更に掘り下げていくことになった。本報告では、『ミシシッピ川的生活』を機として前面に押し出されてくるトウェインの〈奴隷制〉への関心の推移を、主としてディケンズの影響という観点から探り、その帰着点を『それはどっちだったか』と題された晩年の長編小説に見出したい。

講師：天野みゆき「風景の創出——ナイアガラと先住民、移民を巡って」

ディケンズは1842年、トウェインは1867年に初めて大西洋を横断した。この航海とそれに続く旅の体験が両作家に多大な影響を与え、「旅」が著作の核と言えるほど重要になったことはよく知られている。彼らは、先行テクストを通して蓄積したイメージを打ち砕かれ、風景、ひいては国家・社会、人間の見方を大きく変えることを

余儀なくされた。本発表では、この最初の大西洋の彼方への旅がもたらした衝撃を、いかに独自の風景の創出につなげようとしているかという観点から、二人の作家を比較してみたい。『アメリカ紀行』におけるディケンズのナイアガラ観光と、トウェインの「ナイアガラの一日」(1869)においては、風景の創出を通して、先住民と移民の問題も映し出される。トウェインの『イノセント・アブロード』(1869)とディケンズの『マーティン・チャズルウィット』(1844)との関連性を視野にいれながら、これらの問題を検討する。

講師：松本靖彦「Authorship と Expectations——著作権問題から見たディケンズとトウェイン」

1842年の初訪米時、米国で横行する自作の海賊版に業を煮やしたディケンズは、英米間の国際著作権協定締結を訴えるが、米国の新聞から手酷い攻撃を受ける。この時の憤懣は、著作権問題を直接扱っていない『アメリカ紀行』の奴隷制糾弾や新聞批判に上乘せされているだけでなく、彼が後に「比類ない(inimitable)」形の authorship を追及していく遠因となった。一方、自分にとって最も生産的な authorship の形を求めてやまなかったトウェインにとって、著作権は必ずしも常にそれを保障してくれるものではなかった。彼は海賊版に対して概ねディケンズよりも捌けた態度を見せているし、経済的破綻から脱却し、家族の将来に備える必要が生じるまでは、財産権としての著作権を強く主張していない。ディケンズとトウェインの著作権に対する姿勢を比較し、両者の著作権問題との関わり方の内にそれぞれの作家としての成長を跡付けたい。

講師：宇沢美子「仮面、言語、異人——ブラックフェイス・ minstrelシーの陽気な文法」

ディケンズが『アメリカ紀行』で絶賛したマスター・ジューバは、タップダンスの祖と目されるアフリカ系のダンサーである。ディケンズの絶賛から 10 年後にはあっけなく亡くなるこの稀代のダンサーは、トウェインも熱狂した異人種装としてのブラックフェイス・ minstrel劇のなかに活躍の場を得、大西洋を越えて仕事をした。本発表ではブラックフェイス・ minstrelシーがディケンズとトウェインに提供していた階級文化的背景をさぐり、両作家の異人種、異教徒、異文化表象との連関を一部なりと考えたい。チャールズ・マッシュューズの一人で複数の役をこなす多声芝居、サンフランシスコ・ minstrel劇団のお笑い和社会批判の組み合わせ——ディケンズとトウェインが各々魅了されたブラックフェイス演技者たちの足跡を参照することで、両作家が「異」(い)なるものを表現する陽気な(陰気にもなる)文法をこの異人種装演劇とどう共有し展開していったのか、その文学的意義を問う。

アクセスマップ



【最寄駅からのアクセス】

- JR 中央線・総武線、東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3分
- 東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5分
- 都営地下鉄三田線・新宿線、東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5分

【住所】 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

